

やま ぐち い せき
山 口 遺 跡

ヤマハ発動機株式会社 G H P 技術棟建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会

やま ぐち い せき

山 口 遺 跡

ヤマハ発動機株式会社 G H P 技術棟建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1993

掛川市教育委員会

序

ここ数年来、全国各地において、ふるさとづくりが提唱されていますが、何よりもその郷土の文化遺産を大切にすることがその原点ではないかと思われます。何千年前からこの掛川市に人々は住み着き、様々な生活の足跡を刻んできました。そうした遺跡や遺物に接するとき、災害や貧苦に耐え生き抜いた先人たちのたくましさとやさしさを感じることができます。

遺跡が所在する土地は、地形的に優れており、遺跡にかかわりなくその後の人々の生活に利用され、また新たな開発などの対象となる場合があります。こうした遺跡は現状保存することができず、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存という措置をとらざるを得ない場合があります。

このたびの発掘調査は、ヤマハ発動機株式会社の技術棟建築工事に伴い、工事に先立ち掛川市教育委員会が実施したものです。発掘調査に際してはヤマハ発動機株式会社はじめ関係諸機関と慎重な協議を重ね、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を得て実施しました。

発掘調査は慎重に行われ、その結果古墳時代から平安時代にかけての遺構などが検出され、今までこの地域の発掘事例が僅少なため貴重なデータを得ることができました。

今回の調査の結果が、私たちの現在の生活が古代からの歴史や文化の基盤のうえに成り立っていることを確認することに役立つとともに、生涯学習宣言都市掛川市のまちづくりにより一層活かせることを望んでやみません。

最後に本書の刊行にあたり、関係各位のご協力とご指導に対し厚くお礼申し上げます。

平成5年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 大 西 珠 枝

例　　言

1. 本書は、静岡県掛川市成瀧322-1外におけるヤマハ発動機株式会社GHP技術棟建設に先立ち、平成4年5月6日より同年7月31日にかけて実施した山口遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、「ヤマハ発動機（株）土地利用計画地内埋蔵文化財発掘調査業務」として、ヤマハ発動機株式会社の委託により、掛川市教育委員会が受託し調査を実施した。
3. 現地の発掘調査は、掛川市教育委員会の大熊茂広が担当した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。

青島信二・長谷川勇次郎・山田繁治・深田好徳・木村治郎・安間積・本樋公太郎・土屋敬一・鈴木福次・大庭虎男・榛葉房子・榛葉いく・榛葉廣子・榛葉たみ江・松浦さわ子・荒川きく・中嶋若枝・山本はるゑ・山本みち・原田てい・鈴木辰江・長谷川幸子・中村すま子・山内よしお・西田泰子・伊藤とよ・鈴木静江・弓桁きよ・榛葉豊子・戸塚智美

5. 現地調査において（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の篠原修二氏には多大なる御教示・御協力をいただいた。
6. 本書の編集は掛川市教育委員会の戸塚和美的助言を得て大熊が行なった。
7. 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育長大西珠枝・社会教育課長榛葉稔・社会教育課参事岩井克允・社会教育課文化係長澤村久雄のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 便宜的に、D・E-2・3グリッドの小調査区を2区とし、その他を1区とした。
2. 挿図における方位は、磁北を示す。（1992年5月現在）
3. 挿図における等高線は10cm間隔である。
4. 本書で使用した遺構名称のSDとは溝状遺構の意味である。
5. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

序
例 言
凡 例

I	発掘調査と遺跡の概要	
1.	調査に至る経過と調査の目的	1
2.	調査の方法と経過	1
3.	遺跡をめぐる環境	1
II	調査の内容	
1.	遺構	7
2.	遺物	15
III	ま と め	17

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	3
第2図	遺跡周辺地形図	4
第3図	遺構全体図	5
第4図	SD02・04・05・06実測図	8
第5図	SD02・08・09実測図	9
第6図	SD11実測図(1)	10
第7図	SD11実測図(2)	11
第8図	SD12・13・14実測図	12
第9図	SD16実測図	13
第10図	遺物実測図	16

図版目次

- 図版1 上 第1面全景（西より）
下 第1面全景（東より）
- 図版2 上 第2面全景（西より）
下 第2面全景（東より）
- 図版3 上 調査前風景（東より）
中 重機掘削風景
下 SD01完掘状況（東より）
- 図版4 上 SD02完掘状況（西より）
中 SD02・04交差状況（南より）
下 SD02・05交差状況（東より）
- 図版5 上 SD07完掘状況（北より）
中 SD02・08・09完掘状況（北より）
下 SD08遺物出土状況
- 図版6 上 SD12完掘状況（北より）
中 SD13完掘状況（東より）
下 SD14完掘状況（北より）
- 図版7 上 SD12・13・14完掘状況（南より）
中 SD15完掘状況（北より）
下 SD16完掘状況（南東より）
- 図版8 上 台付甕出土状況
中 第2区 SD10完掘状況（北より）
下 第2区 SD18完掘状況（北より）
- 図版9 出土遺物（1）
- 図版10 出土遺物（2）

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

山口遺跡は国道1号線が地内を通過しており、また国道1号線掛川バイパスも遺跡のすぐ北側を通過している。国道1号線の周辺は、掛川市はもとより静岡県において、または全国的においても物流などの大動脈のひとつであるため、大企業関連の施設・工場の進出も多くみられるところである。

今回の調査は、ヤマハ発動機株式会社が山口遺跡地内におけるガスヒートポンプ技術棟新築工事用地造成が契機となっている。平成3年4月1日付けで埋蔵文化財確認調査依頼が掛川市教育委員会に提出され、平成5年5月13日～17日にかけて確認調査を実施した。その結果、本調査の実施が必要となり、平成4年度事業として掛川市教育委員会が行なうことで調整が進み、平成4年5月に着手となった。

今回の調査は上記の経緯に基づき記録保存を目的とし、広い範囲にわたり、不明なことの多い山口遺跡の一角にメスをいれ、成滝地区の歴史の一端を少しでも明らかにすることとして実施された。

2. 調査の方法と経過

今回の調査区画は調査地限界にあわせ、それを任意の基本線として、調査地内に5m方眼の区画を設定した。設定した区画の南北線の磁北は、N-18°57'00"-Eである。調査ではこの区画に従い遺物の取り上げ・遺構の検出位置確認・図面作成等を行なった。

現地での図面は、遺構全体図は20分の1縮尺で、土層断面図は対象の大きさにより10分の1縮尺と20分の1縮尺を適時選択し、遺物の出土状況図は10分の1縮尺でそれぞれ作成した。

写真撮影は、プロニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを使用した。

以下、調査の経過をしるす。

平成4年5月6日～5月8日	第1面調査開始・重機による調査区掘削・集水升設置・排水溝掘削
5月11日～7月14日	グリッド設定・遺構確認・遺構掘削・各種図面作成・写真撮影
7月15日～7月16日	第2面調査開始・重機による調査区掘り下げ
7月17日～7月28日	遺構確認・遺構掘削・各種図面作成・写真撮影
7月29日～7月30日	下層最終確認試掘坑掘削・発掘器材の片付け

3. 遺跡をめぐる環境

1) 地理的環境

山口遺跡は掛川市街から東方約1.5km、国道1号線を南北からはさむ形で存在する。山口遺跡の範囲は、西は宮脇地区から東は成滝地区にかけて、東西約1.4km、南北約0.7kmと広い。今回の調査地は遺跡の東寄り、国道1号線のすぐ北側にあたる、成滝地内にある。ちなみに、成滝とは、地内を通る逆川の流れがこのあたりで激流となり、ゴウゴウとまるで滝のような音をたてていた事から由来するといわれる。現在、河川改修によって川の様子は変わりつつあるが、河岸段丘の段丘線のうねりはその

まま逆川の荒々しい蛇行をうかがわせている。遺跡はその逆川によって形成された沖積地に立地する。北は標高60～70m程の丘陵地で、南は逆川に面する。

2) 歴史的環境

山口遺跡周辺の遺跡分布は割合濃密であるが、発掘調査例は決して多くなく、したがってその性格が知られる遺跡は少ない。そのような状況で、山口遺跡の歴史的環境を論じるのは少々難しいが、補うものとして「掛川市遺跡地名表」（以下、地名表）を用いて概観してみたい。

まず、山口遺跡は前述したように広い範囲にまたがっているが、地名表によると、弥生時代後期・古墳時代後期～平安時代の遺跡とされている。

以下、各時代ごとの概観を調査例を中心に述べていこう。先土器時代と縄文時代の遺跡は現在まだ知見がないため、弥生時代からみていきたい。

地名表によると、弥生時代中期の遺跡として、55後沢遺跡と76畠中遺跡の2遺跡がみられるのみである。しかし、弥生時代後期となると遺跡の数は俄然多くなる。これはこの地域に限ったことではなく掛川市域の各地でみられる現象であるようだ。弥生時代に該当する調査例として1965年に発掘調査された28天王山遺跡では後期の竪穴住居跡が6軒検出され、さらに嶺田式になると思われる甕の口縁部が出土している。また、91大六山遺跡では後期から古墳時代前期にわたる、竪穴住居跡25軒、方形周溝墓16基、その他、土壙・土器棺等が検出された。

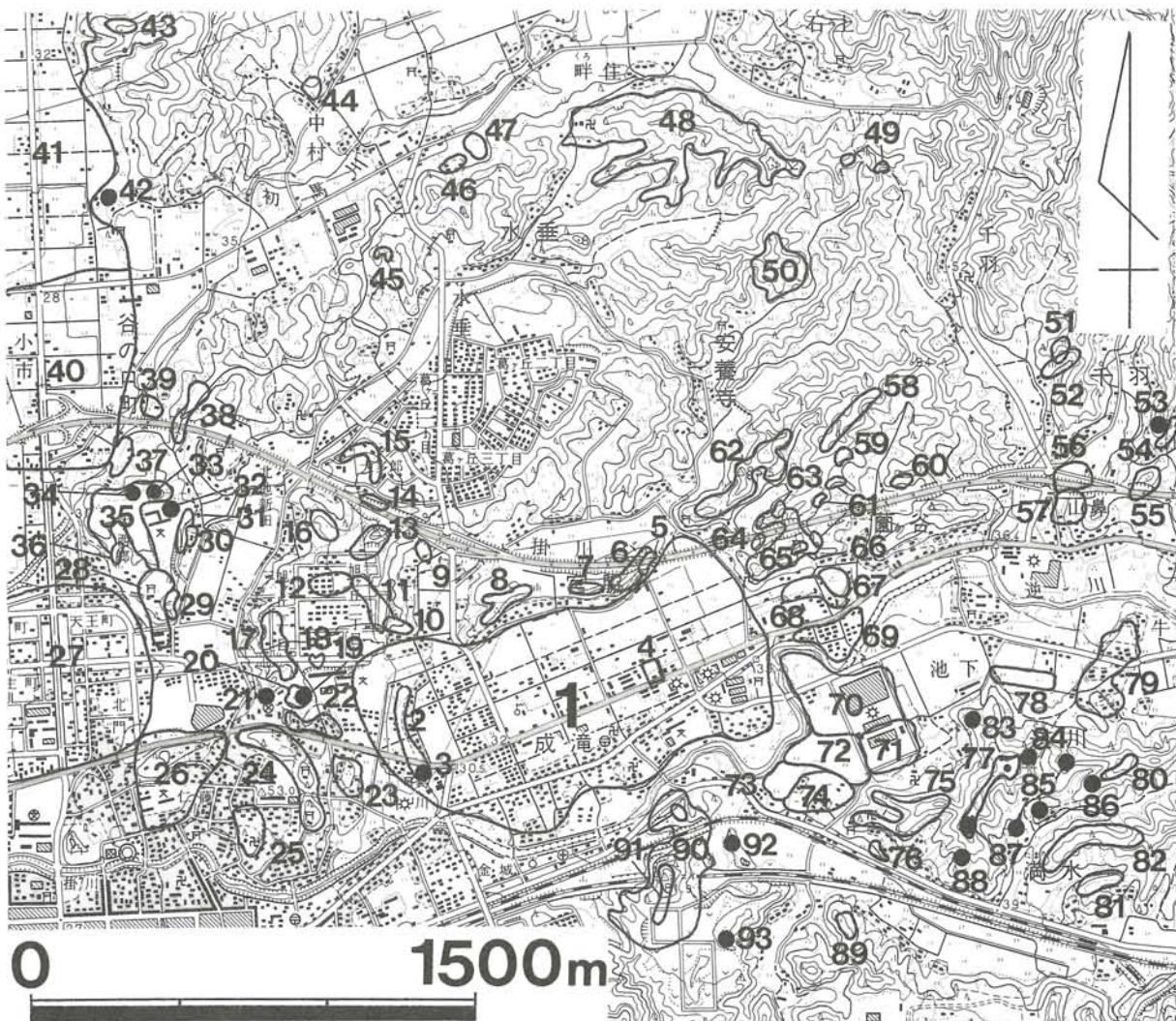
古墳時代前期は弥生時代後期とほぼ同じ様相であるが、古墳時代中期になると、集落跡とされる遺跡の数はかなり減ってしまう。さらに、後期とされているものはまた数を減らしている。これは、未だ発見されていないだけであろうと思われ、今後、調査が進めば確実に増加するものと考えていいただろう。なぜなら、古墳・横穴墓がこの地域にも少なからずみられるからである。内容的に詳しくわかっているものは少なく、和田岡地区から長谷地区にかけてみられるような有力なものは今まで見つかっていない。

奈良時代・平安時代の該当遺跡も少ない。これも今後増えていくものと思われる。当該期の遺跡の調査例として62安養寺遺跡があげられる。12世紀初頭の寺院跡と考えられる遺構が、灰釉陶器・鉄釘等をともない検出された。

山口遺跡の周辺はこのように不明な点が多く、歴史的環境を語るのは難しいが、単純に遺跡の数をみれば、確実に人々のくらしはそこにあったであろうし、決して人口が疎であったところではないと思われる。

《引用・参考文献》

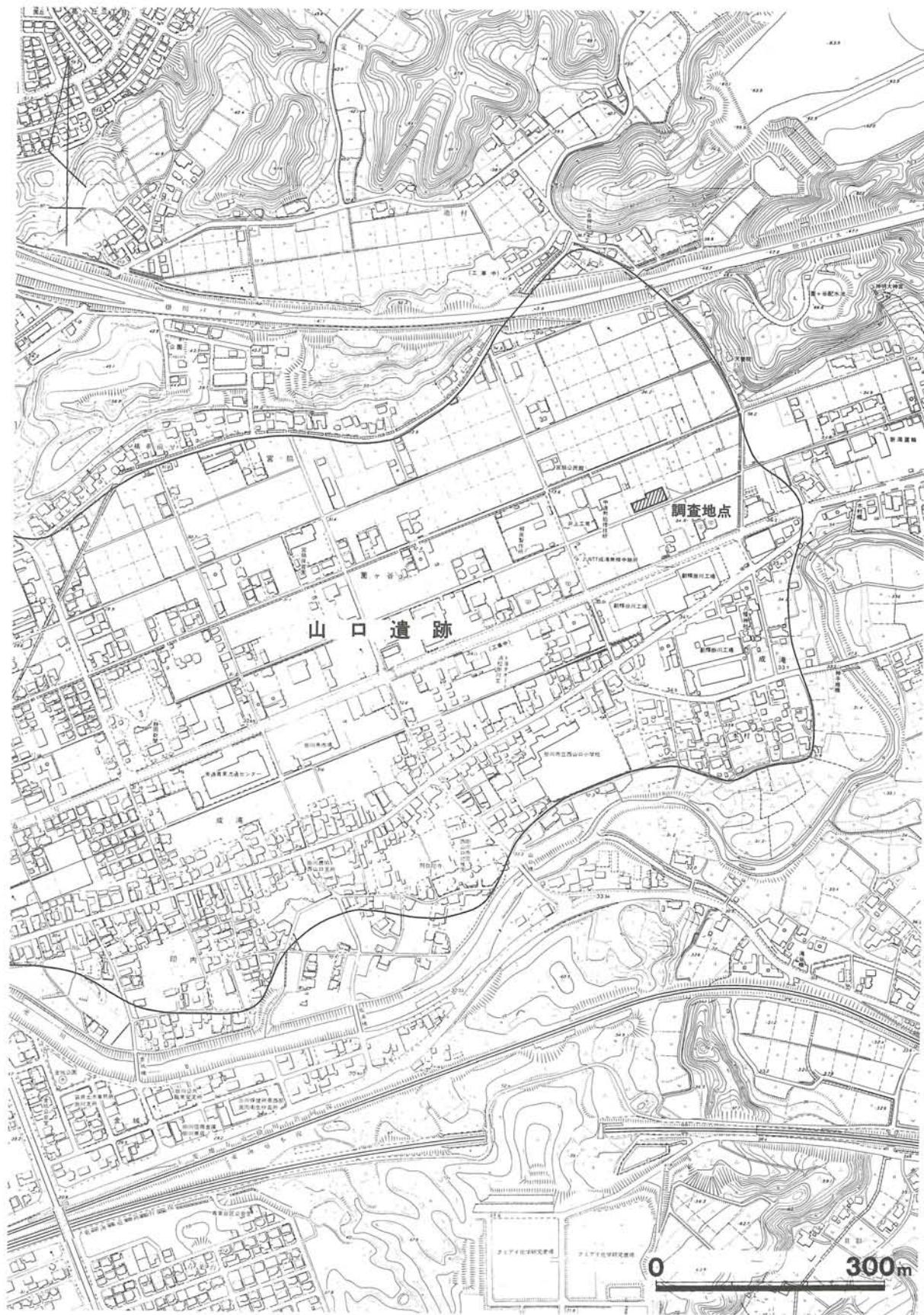
- 1.『掛川誌稿（全）』 斎田茂先編 名著出版 1972
- 2.『掛川市遺跡分布調査報告1』 掛川市教育委員会 1984
- 3.『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会 1968



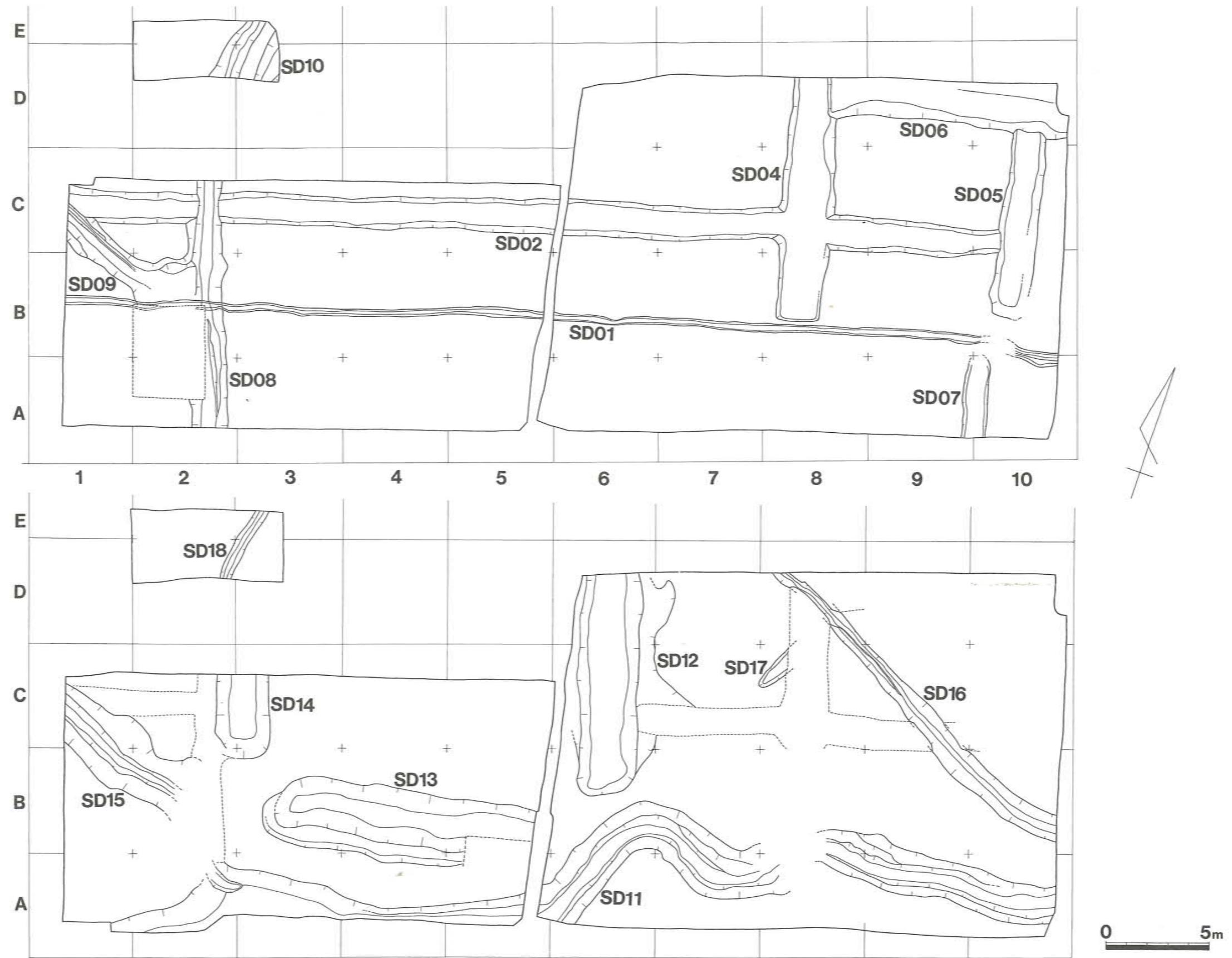
第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

遺跡地名

1. 山口遺跡
2. 堀ノ内
3. 神明神社古墳
4. 成瀧館
5. 山郷山横穴群
6. 山郷山・山郷山古墳群
7. 横垂
8. 宮脇古墳群
9. 西田
10. 西田横穴群
11. 西田古墳群
12. 大ヶ谷古墳群
13. 大平山・大平山古墳
14. 大多郎
15. 大多郎古墳群
16. 宝田古墳群
17. 御所原
18. 大ヶ谷横穴群
19. 三条久保古墳
20. 三条久保
21. 狐塚古墳
22. 井屋ノ谷
23. 葛川西田
24. 妙見山古墳
25. 笠町砦
26. 子角山
27. 下西郷
28. 天王山
29. 西山
30. 下清水横穴群
31. 下清水古墳
32. でんでこ山古墳
33. 八景山古墳
34. 原新田古墳
35. 天王山砦・原新田
36. 蔽田横穴群
37. 戸塚
38. 戸塚
39. 日守田
40. 加島
41. 中下
42. 下山古墳
43. 中山古墳群
44. 会下ノ谷
45. 大谷横穴群
46. 谷ノ坪I
47. 谷ノ坪II
48. 水垂城
49. 砥石
50. 廃安養寺跡
51. 大谷古墳群
52. 大谷横穴群
53. 中屋敷古墳
54. 中屋敷横穴群
55. 後沢
56. 郷下
57. 往環北
58. 深谷古墳群
59. 深谷横穴群
60. 御堂ヶ谷横穴群
61. 谷通横穴群
62. 安養寺
63. 山郷横穴群
64. 元屋敷
65. 神明横穴群
66. 峯山
67. 古明
68. 寺峯
69. 下川原
70. 神子地
71. 堂下
72. 天神
73. 中西
74. 高畠
75. 南郷古墳群
76. 畑中
77. 踊原
78. 池向
79. 原ノ向
80. 大久保
81. 原山
82. 深谷古墳群
83. 前田古墳
84. 踊原
85. 山郷古墳群
86. 大久保古墳群
87. 宮ヶ谷行人塚
88. 正福寺古墳
89. 日影谷
90. 大六山砦
91. 大六山
92. 蝶田口行人塚
93. 蝶田古墳



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 遺構全体図

II 調査の内容

1. 遺構

今回の調査において、試掘調査時に予想されたように2面の文化層を検出した。また遺構はすべて溝状のもののみであった。

ここでは、第1面・第2面と面ごとに分けて遺構の概略を述べたいと思う。

1) 第1面

第1面からは計9本の溝状遺構を検出している。概ね直線的なものが多く、何らかの企画性を感じさせるものがみられる。

SD 01 (第3図)

SD 01はB-1～10グリッド、調査区中央寄りをほぼ直線的に東西にはしる。幅はおよそ一定で確認面で約30～45cm、底面で約15～20cmをはかる。断面形はU字に近い逆台形を呈し、深さは約15～20cmである。覆土は暗灰褐色砂質粘土で炭化粒を少量含んでいる。また底面には、暗黄灰褐色を呈し、砂質を帯びるが粘性の強い粘土が約5cm程の厚さで堆積していた。さらに、底面は東から西へだんだん低くなっている。B-10グリッドとB-1グリッドでは高低差約22cmをはかる。

遺物は土師器・須恵器があるが、ほとんど小破片で数もかなり少ない。灰釉陶器坏破片1点が唯一図化できたものである(第6図の1)。出土レベルは底面から約17cmの上層であり、流れ込みであると思われる。しかし、この遺物の出土により、SD 01は今回調査の全遺構中、一応最も新しく位置付けられるであろうと考えている。

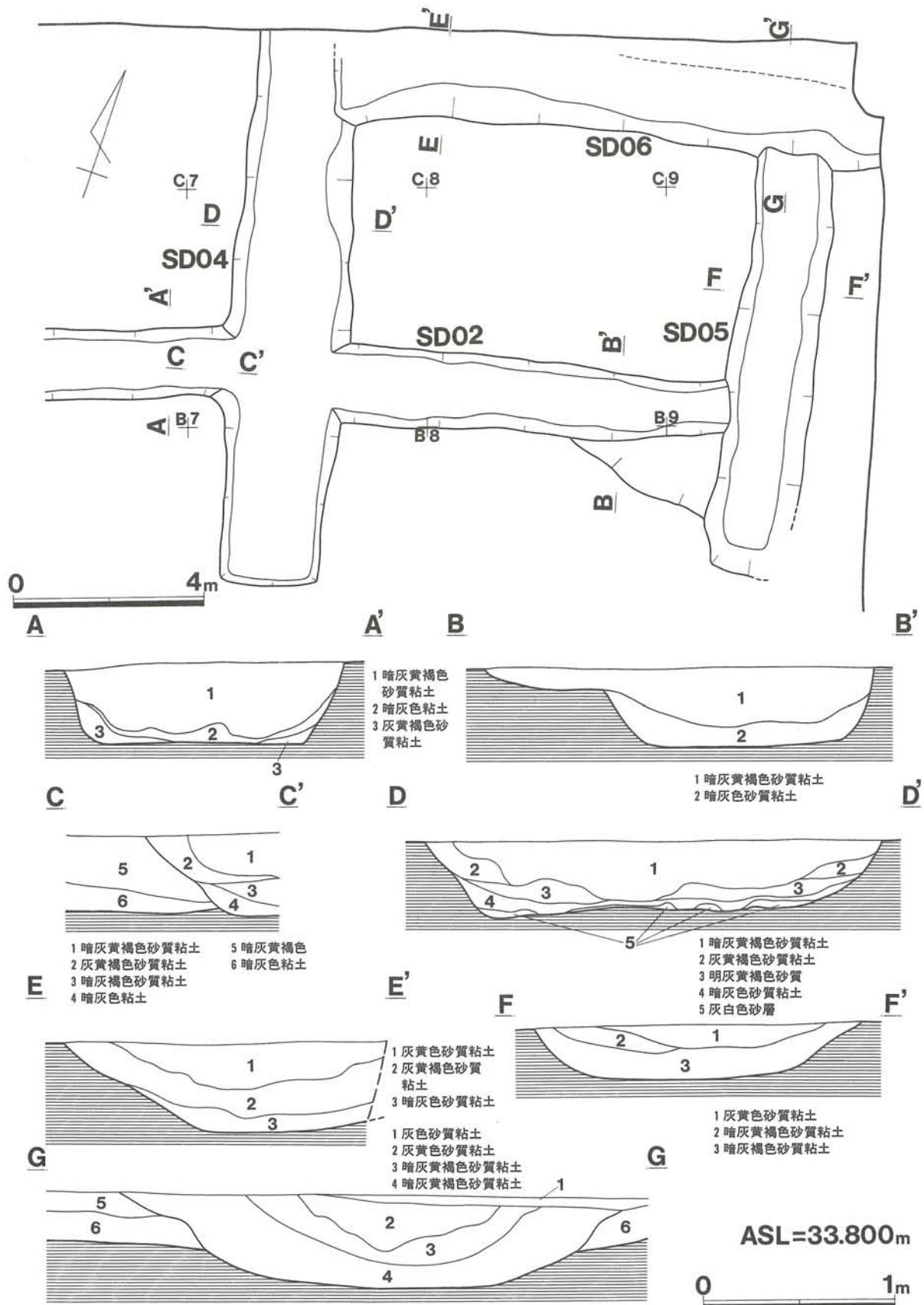
SD 02 (第3・4・5図)

SD 02はC-1～10グリッド、調査区中央やや北寄りをSD 01とほとんど平行に、ほぼ直線的に東西にはしる。幅は大体一定で確認面で約1.5m、底面で約1.0mである。底面はほぼ平らで断面形は逆台形に近い。覆土は暗黄灰褐色砂質粘土で、底面には暗灰色粘土が5～10cm程の堆積をみせ、ところによっては、砂質が強くなるか、砂層が堆積している部分もみられた。深さは、約30～45cmをはかるが、それは確認面の高低に左右されており、底面の高低差はほとんどないに等しい。しかしC-10グリッドでSD 05と接触するあたりでは、底面はだんだん上がってゆき、幅も1m程と狭くなり、結果SD 05に切られており不明になっているが、SD 05の通る場所から東には続かずに終わっているようである。SD 02はSD 04・05・08・09と交差しておりそれぞれと切り合い関係にある。SD 04・05には切られていることは土層断面観察により確認でき、SD 08・09を切っていることは平面的にも確認している。

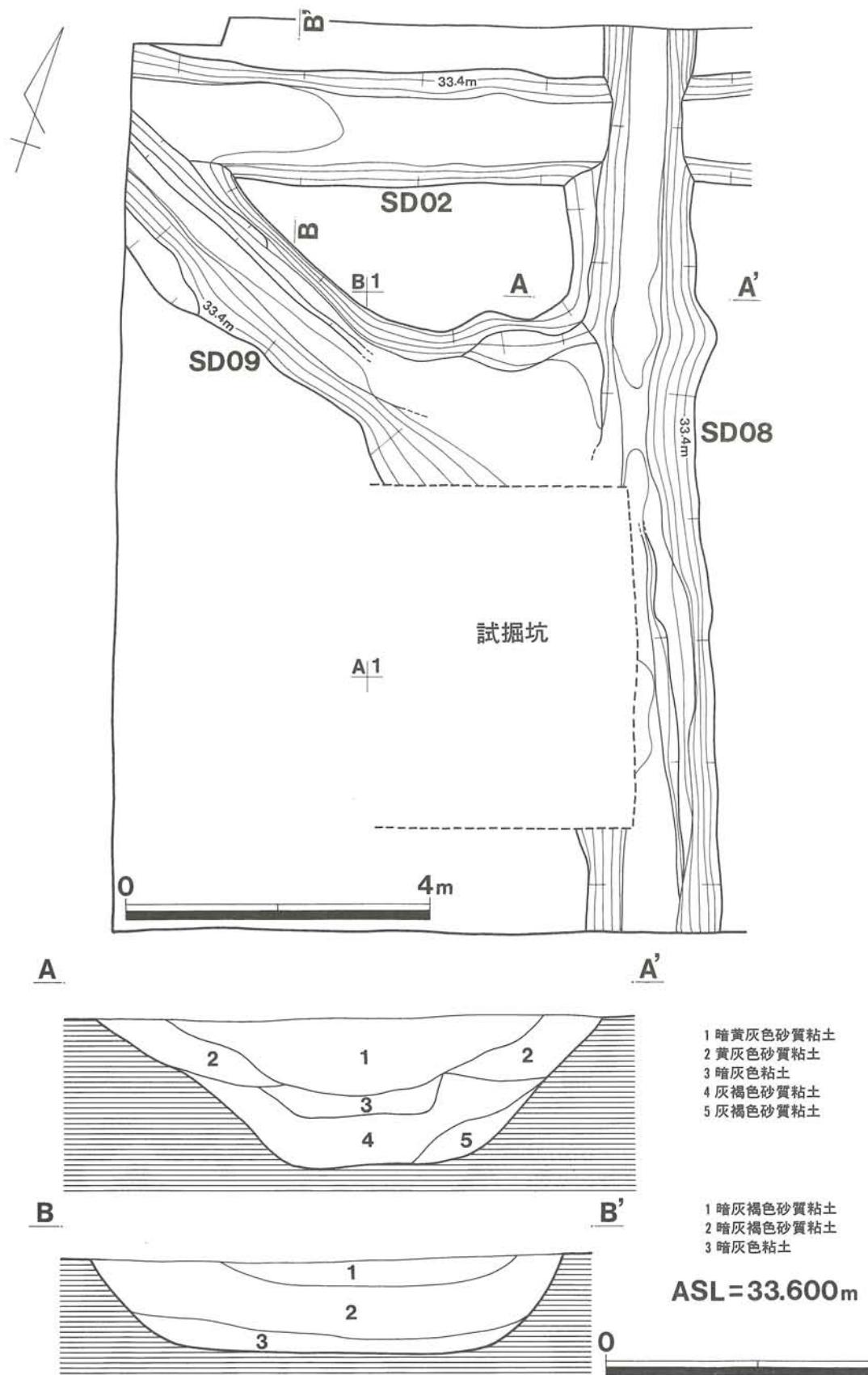
遺物は土師器・須恵器が出土しているが数は少ない。

SD 04 (第4図)

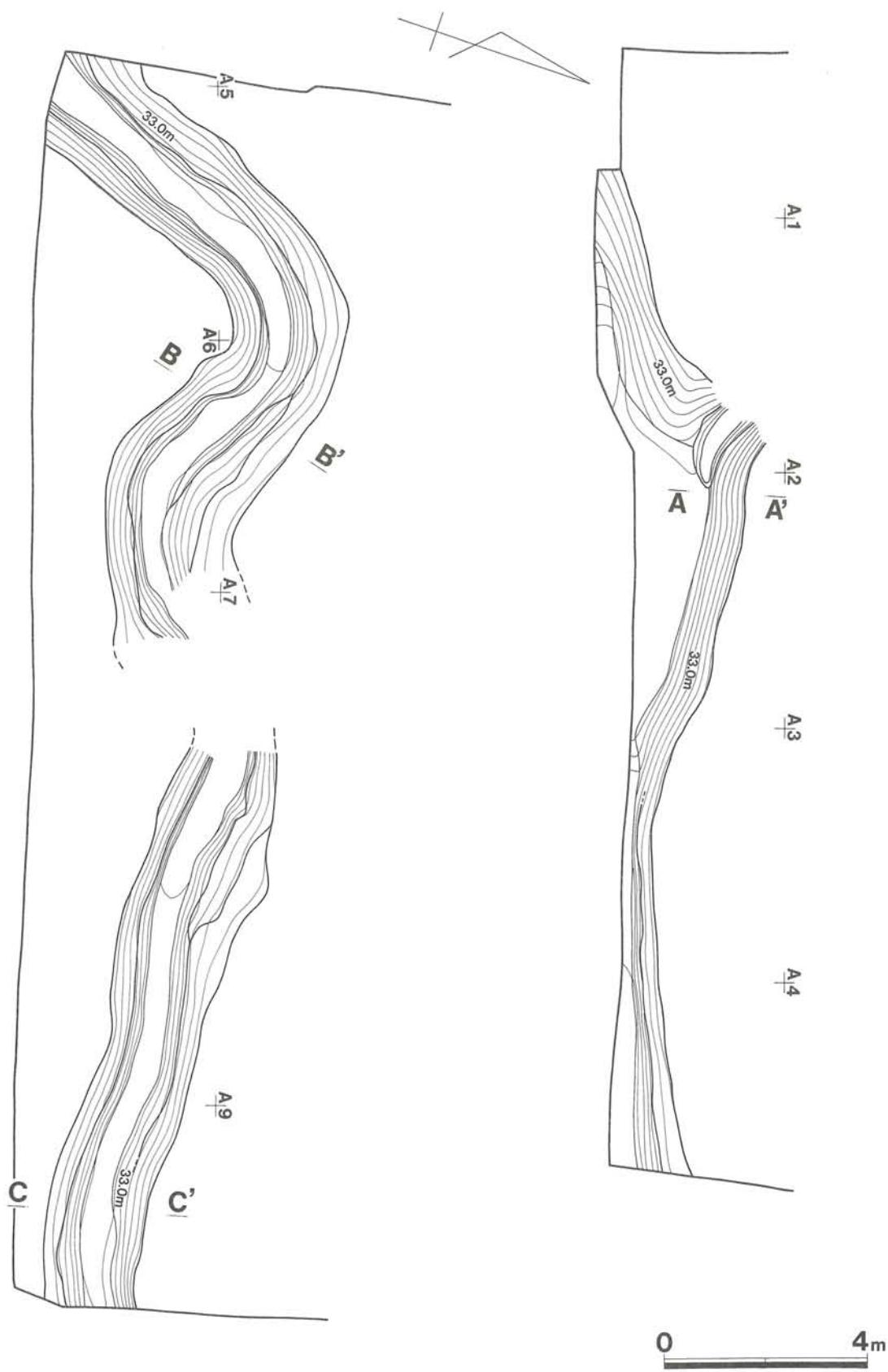
SD 04はB・C・D-7グリッドにおいて検出した、ほぼ直線的に南北方向にはしる溝である。幅はSD 02よりやや広く、約2.2～2.5mをはかる。断面形は逆台形で、深さは約30～40cm、底面の高低差はほとんどない。底面には灰白色砂の堆積がみられる。またB-8グリッドにおいてSD 04はSD 01の直前で急に立ち上がって終わってしまう。さらに、調査区北側の排水溝掘削時の土層観察で、北側も急に立ち上がって終わってしまっていることを確認しているので、SD 04は長さ約12m



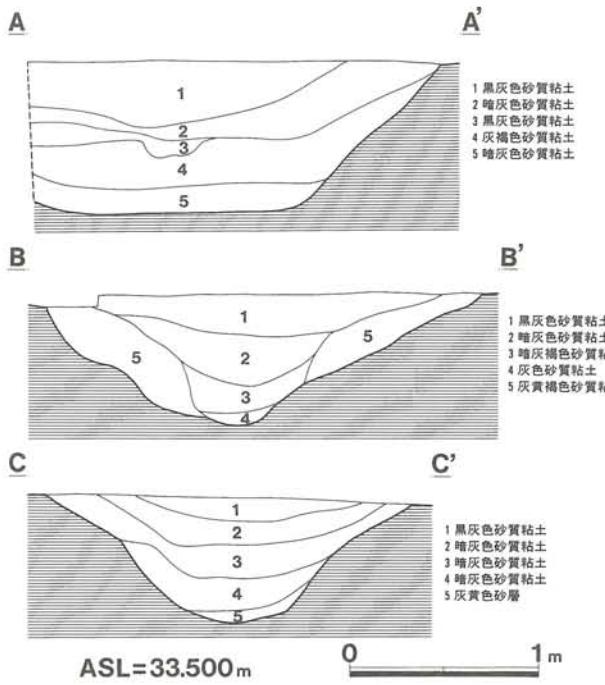
第4図 SD02・04・05・06実測図



第5図 SD02・08・09実測図



第6図 SD11実測図(1)



第7図 SD 11 実測図（2）

に切られているが、調査区北側排水溝壁の土層観察では北に続いていることを確認している。

遺物は土師器・須恵器があるが少ない。

SD 0 6 (第4図)

SD 0 6 は D-8 ~ 10 グリッドに位置し、東西方向に直線的にはしる。幅は、北側の立ち上がりが調査区外に及んでいること、D-10 グリッドにおける調査区北壁の崩落により、全体的にはわからないうが、土層断面を参考にすると 3 m 程であったと思われる。断面形は逆台形に近く、深さは約 45cm をはかる。底面の東西の高低差はほとんどない。下層は粘性の強い砂質粘土が 5 ~ 15cm の厚さで堆積し、底面には灰白色砂が溜まっているのがみられた。

西側は SD 0 4 とちょうど接するところで急に立ち上がって終わる。東側は調査区外に及んでいる。

遺物は出土していない。

SD 0 7 (第3図)

SD 0 7 は A-9 ~ 10 グリッドで検出した。南北方向にはしる。軸はほぼ SD 0 5 と同じである。幅は約 1.2m をはかる。断面形は逆台形を呈し、深さは約 20cm である。底面の高低差はほとんどないに等しい。SD 0 7 も SD 0 1 の手前で立ち上がり終わっている。

遺物は土師器があるが小破片のみで数は少なく、時期はおろか器形すらも判然としないものである。

SD 0 8 (第5図)

SD 0 8 は A · B · C - 2 において検出している。また、2 区 D · E - 2 · 3 グリッドにおいて SD 1 0 と平行に検出している溝も SD 0 8 の続きである可能性があるため、ここであわせてみていきたい。

幅は北からみていくと、E-3 グリッドでは約 0.8m、C-2 グリッドで SD 0 2 とぶつかる手前で 12m、SD 0 2 とぶつかった直後は 1.6m、それ以降は約 1.8m をはかる。断面形は逆台形である。深さは約 50 ~ 60cm とやや深い。底面の高低差は 2 区では約 8 cm で南が低く、1 区では約 6 cm でやはり南が低い。1 区と 2 区の差は約 20cm あり、1 区つまり南が低い。また B-2 グリッドで SD 0 9 とぶつかったあたりは底面が少々高くなるようだ。覆土は砂質粘土だが砂利・岩盤ブロックを多く含んでお

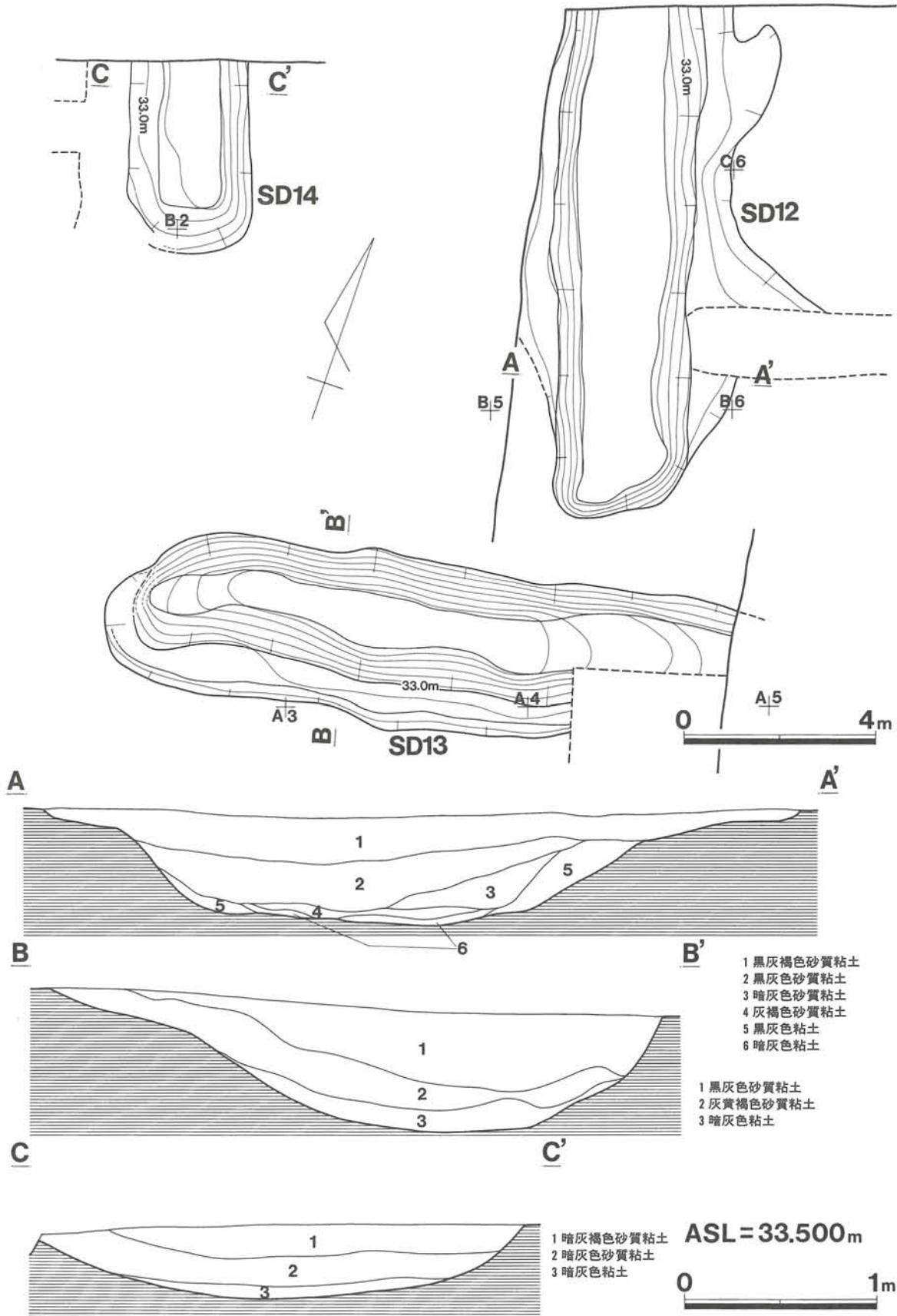
の溝であることがわかった。SD 0 4 は SD 0 2 · 0 6 と切り合っている。前述のように SD 0 2 を切っているが、SD 0 6 には切られている。

遺物は土師器・須恵器が出土しているが少ない。

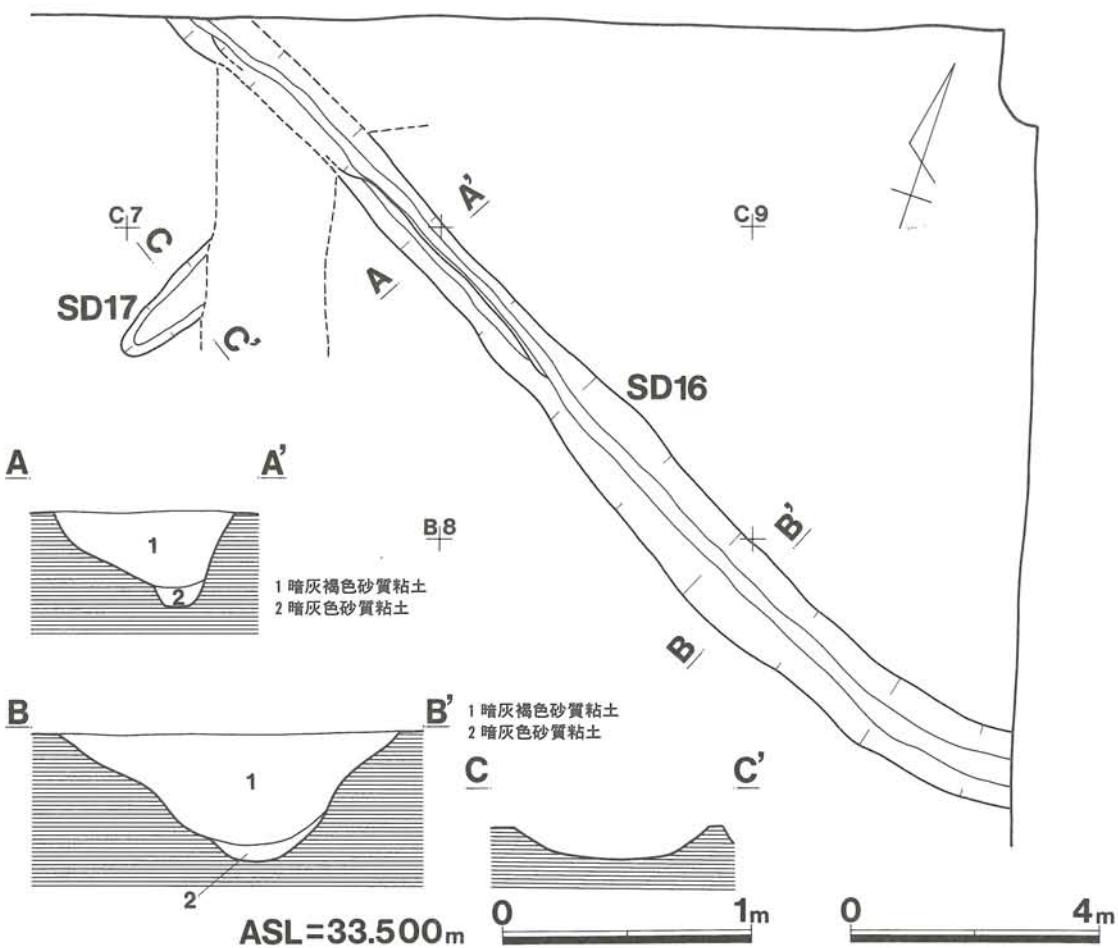
SD 0 5 (第4図)

SD 0 5 は B · C · D - 9 グリッドに位置し、南北方向に直線的にはしれている。幅は約 1.6 ~ 1.8m をはかる。断面形はやや角の丸い逆台形に近く、深さは約 30cm で、底面の南北の高低差はほとんどない。南側は SD 0 4 と同様に SD 0 1 の手前でゆるやかに立ち上がっている。

D-10 グリッドにおいて SD 0 6



第8図 SD12・13・14 実測図



第9図 SD16・17実測図

り、他の溝の覆土とはまるで違っている。また、1層と2・3層の間には炭化物の薄い堆積があり、一度に機能を失ったものではない事をうかがわせる。

遺物は比較的多く出土している。ほとんどが土師器で須恵器はごく僅かであった。

SD09 (第5図)

SD09はB-1・2グリッド、C-1グリッドにおいて検出した。北西方向から南東方向にはしる。B-2グリッドにおいて、SD08に切られており、また試掘坑が入ったために、その先に繋がっていくのかは不明になっている。試掘時の土層断面観察は試掘坑南壁にておこなわれ、SD08の西側立ち上がりは確認されたがSD09と思われるものは検出されていない。断面形はやや崩れ偏った逆台形で底面には細い溝状の落ち込みがはしる。覆土には砂利・岩盤ブロックを多く含む。

遺物は他の溝に比べては多く出土している。形を止めておらず元の姿がはっきりしないものが多いが木製品であろうものが5点出土している。土器は土師器の小破片のみであった。

SD10 (第3図)

2区D-3グリッドに位置する。南東側の上場は調査区外に出ているが、調査区壁で土層観察した結果、幅は推定で1.2m程である。断面形は逆台形で、深さは約25cm。覆土は砂利混じりでSD08と似ている。遺物の出土はなかった。

2) 第2面

第2面は8本の溝を検出している。いずれの遺構も遺物はきわめて少なく、土師器の小破片のみであった。

SD 1 1 (第6・7図)

SD 1 1は調査区南側、A-1~10グリッド、B-6~9グリッドにかけて検出した。東西方向に蛇行をみせながらはしる。幅は2m前後。断面形は逆台形、もしくはV字に近い逆台形を呈し、中段を持つことも特徴的である。底面の高低差は東西で約20cm程で東から西へ低くなっている。含有量の多い少ないはあるが、どの層にも炭化物・炭化粒が含まれていた。

SD 1 2 (第8図)

SD 1 2はB・C・D-6グリッドにおいて検出した、南北方向に直線的にはしる溝である。上面は浅く広がっているが、中段にあたる部分の幅はおおよそ2.6~3.0mである。断面形はほぼ台形に近く、深さは約50cmをはかる。底面の高低差はほとんどないに等しい。また、底面には粘性の強い黒灰色粘土・暗灰色粘土の堆積がみられる。南側B-6グリッドにおいてSD 1 1とぶつかる手前で急に立ち上がり終わっている。

SD 1 3 (第8図)

SD 1 3はA-4・5グリッド、B-3・4・5グリッドにおいて検出した。東西方向におおむね直線的にはしる。南側の上面は浅い小段状になっている。幅は最大3.6m、小段状の部分からは約2.3~2.6mをはかる。断面形は丸みの強い逆台形で、深さは約30~80cm。西側はB-3グリッドで徐々に立ち上がり終わる。東側の立ち上がりは排水溝で切られてしまい不明だが、やはり底面が徐々に上がっていく様子がみられる。底面には炭化物をやや多く含む、粘性の強い暗灰色粘土が堆積している。

SD 1 4 (第8図)

SD 1 4はB・C-2・3グリッドにて検出している。B-2杭から西はSD 0 8によって上面を壊されており、図示した西側立ち上がりは本来のものではないが、現状での幅は約2.6mとなる。断面形はやや深い皿型を呈し、深さは約40cmをはかる。覆土には炭化物・炭化粒はみられない。底面には粘性の強い暗灰色粘土が堆積していた。南側はまるでSD 1 3と角を突き合わせるかのように、立ち上がり終わっている。

SD 1 5 (第3図)

SD 1 5はSD 0 9の前段階の溝である。幅は最大で約3.2mをはかる。深さは約75cm、中段から底までは約30cmをはかる。覆土には炭化物が含まれるが、底面には特に多く、粘性の強い暗灰色砂質粘土と共に約5cm程の堆積がみられた。また、はっきりとした継続関係は不明だが、A-2グリッドの三日月状の浅い掘りこみはSD 1 5がそこまで続いている可能性を示唆していると思われる。

SD 1 6 (第9図)

SD 1 6はB・C・D-8・9・10グリッドに位置し、南東~北西方向にはしる。幅は0.8~1.4mをはかる。断面形はV字に近く、深さは約40~50cm、底面の高低差は約6cmで北東側が低い。

SD 1 7 (第9図)

C-8グリッドにおいて検出した。東側はSD 0 4に切られ不明となっている。軸は南西~北東の方向で、SD 1 6に対してほぼ90度の角度をもつ。

SD 1 8 (第3図)

2区で検出した、幅約60cmで南北にはしる。軸の方向は第1面の溝とほぼ同じである。断面形は逆台形で、深さは約25cmをはかる。

2. 遺物 (第10・11図)

1はSD01より出土した灰釉陶器坏破片である。口径は推定で15.1cmをはかる。漬け掛けにより施釉している。

2～4はSD02から出土したものである。2は須恵器坏蓋破片で、半分強残存している。口径は9.2cmをはかる。口縁部は若干の内湾を見せてみせており、屈曲部から0.5cm上には稜がみられる。天井部は約2分の1上にヘラケズリが施されている。時期は6世紀末に比定されよう。

3は須恵器坏身破片である。約4分の1が残存している。いずれも推定値だが、口径は11.9cm、最大径は14.0cmをはかる。口縁端部は若干の外反をみせて、やや高く立ち上がる。受け部の断面形はまるみのある三角形にちかい。外面胴下半部にヘラケズリを施している。内面はナデ調整している。

4は小皿である。推定で口径は7.6cm、底径は4.6cm、器高は2.0cmをはかる。

5はSD04覆土上層からのもので、綠釉陶器碗になると思われる小破片である。素地は灰色である。外面には花弁が浮き彫り状にみられる。

6・7はSD08から出土したものである。6は土師器把手付甕と思われるものである。口径は22.9cmをはかる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。調整は内外面とも磨耗が著しくほとんど不明であるが、頸部外面と口縁部内面にハケメ痕がわずかに残っている。7は須恵器陶臼である。底部を若干欠いているほかは完形であった。口径は13.4cm、底径は9.0cm、器高は15.9cmをはかる。胎土は緻密で、色調は白さの強い灰白色を呈す。底部は約1.7cm程の厚みであったと思われる。底部は段を有しやや丸みをもって立ち上がり、口唇部はやや丸い端面をもつ。外面には器面をほぼ均等に3分割するように2条ずつの浅い沈線が2組めぐる。時期は7世紀後半代と思われる。

8は唯一図化できた第2面の遺物である。SD15から出土した古式土師器壺有段口縁破片である。粘土をつまみ锷状に引き出している。広い端面は中程に浅い沈線状のへこみがみられる。

9以降はすべて遺構外からの出土遺物である。また、すべて第1面からのものである。

9から11は遺構確認精査時にB-8グリッドから出土したものである。9は灰釉陶器坏底部破片である。高台径は推定で6.8cmをはかる。高台は三日月型の断面をもち、内外面はナデ調整されている。

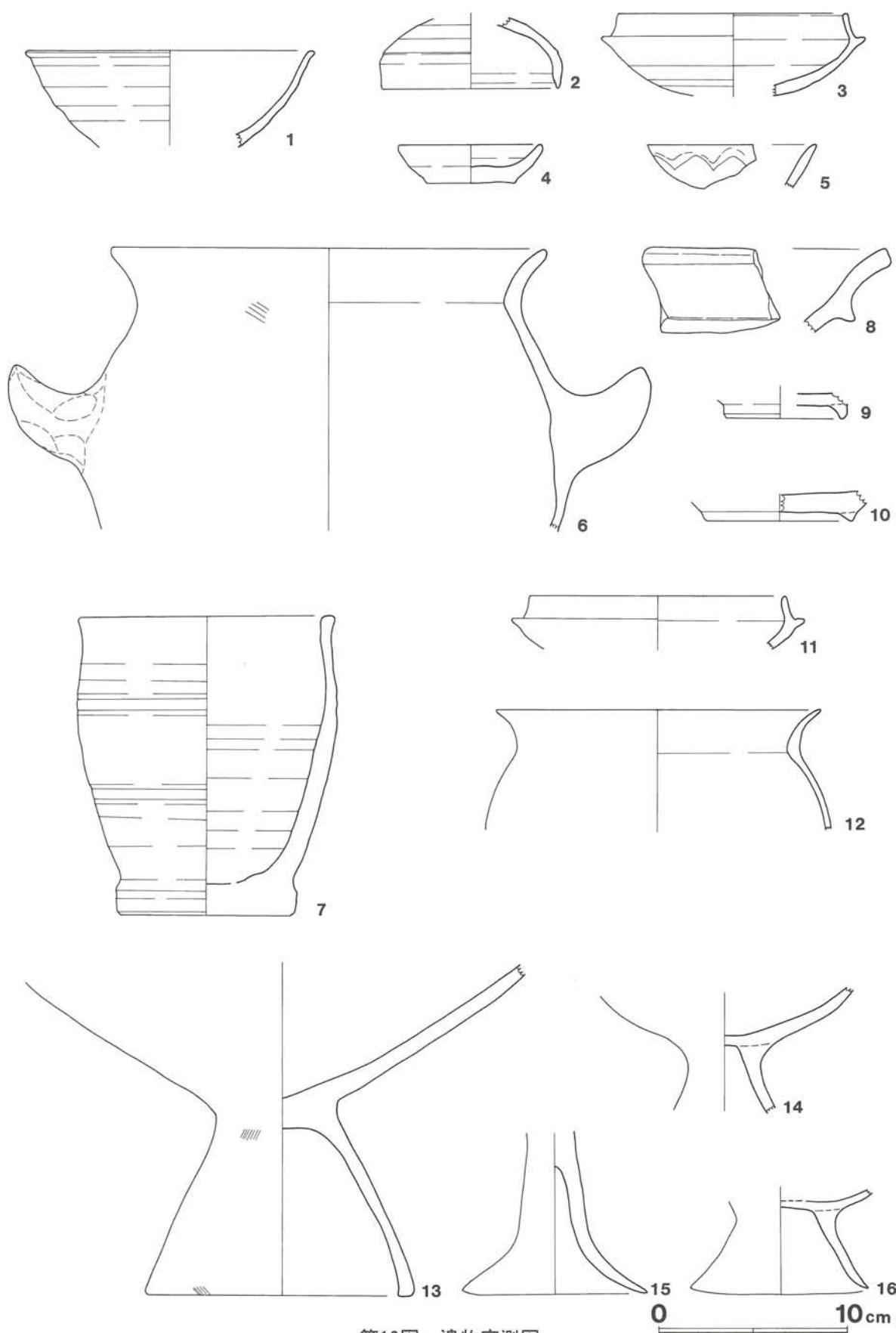
10は山茶碗底部約2分の1破片である。高台径は推定7.8cmをはかる。高台は断面三角形をなす。

11は須恵器坏身破片である。推定で口径は13.6cm、最大径15.6cmをはかる。口縁端部は若干外反しながら立ち上がり、受け部は断面三角形に近いもので、器厚は厚めでシャープさにかける。内外面ともナデ調整している。

12はB-8グリッドにおいて出土した土師器甕口縁部～胴部上半破片で口径は17.2cmをはかる。色調は暗茶褐色である。調整は磨耗のため不明。12に伴いS字口縁台付甕破片が出土している。

13はA-8グリッドから出土した台付甕である。大型のもので、脚部下面の径は14.3cmをはかり、脚部の高さは10cmを超える。内外面とも磨耗は著しいがハケメ痕が僅かに残る。

以下3点はいずれも土師器高坏である。14はA-2グリッドから出土した。内外面とも磨耗著しく調整は不明である。15はA-6グリッドから出土した脚部である。長脚のもので、裾は大きく開く。底径は9.0cmをはかる。調整は磨耗のため不明。16はA-2グリッドから出土した脚部である。ハの字に開く短脚のもので、底径は9.5cmをはかる。磨耗が激しく調整は不明である。



第10図 遺物実測図

III ま と め

ここでは、まとめとしてまず特徴的な点を各面ごとに整理して、若干の問題提起をしてみたい。

1. 第1面について

まず、この面における遺構の順序を、主に切り合いからみてみると、古い方から、SD09—SD08—SD02—SD04・05—SD06—SD01となる。SD07とSD10ははっきりしない。さて、ここで注目したいのは、SD01・02・06（A群）とSD04・05・07（B群）は共にほぼ平行関係にあり、さらにA群とB群それぞれの軸線はほぼ直交していることである。SD02・04・05・06は切り合い関係があり、新しい溝が造られる時にはすでに前の溝は埋没していたにもかかわらず、ほぼ平行・直交関係にあることは、そこに何らかの意識・規制のようなものがあったのではないかと思われる。また、検出した遺構中、最も新しいと考えられるSD01であるが、SD04・05・07がその直前で止まるのはなぜであろうか。SD01が通っている場所は以前から何か意識される場所だったのだろうか。

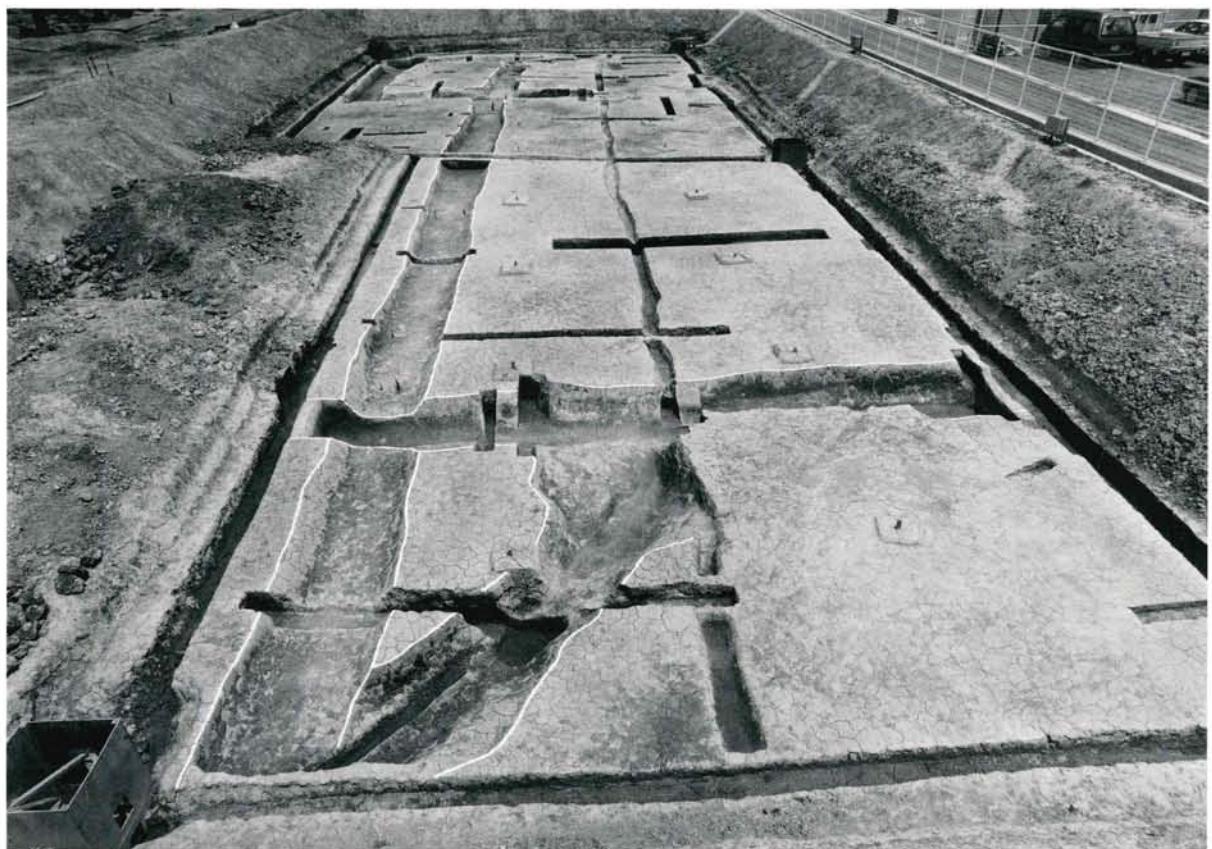
2. 第2面について

この面における遺構の順序は、おおまかにはSD11～14よりSD16・17は古いと考えられる。なぜなら、SD11～14は第1面において、はっきりしないまでも、そこに遺構の存在した痕跡が窺えたが、SD16・17はこの面に至って初めて検出されたものであるためである。

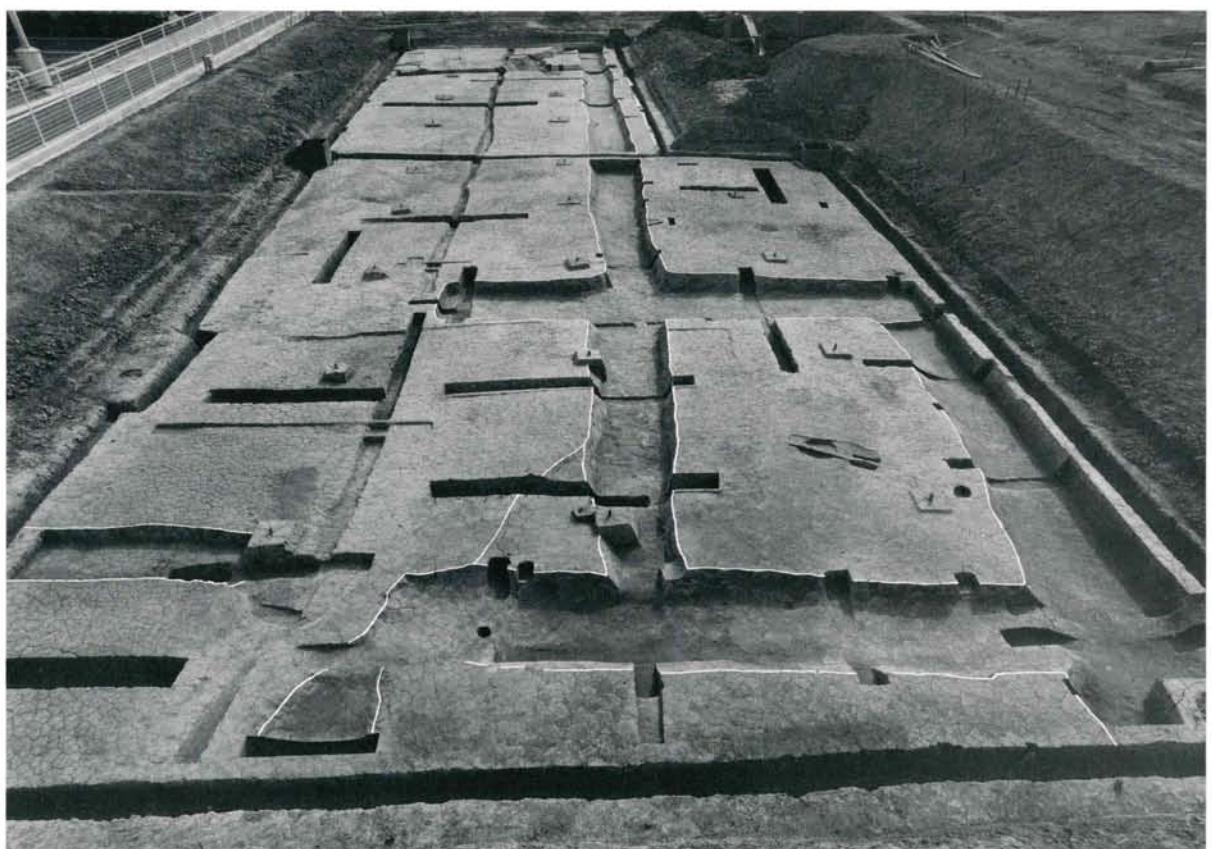
この面で特徴的なこととして注目したいのは、SD12～14の関係である。この3本の溝は、その形態の類似性、相互にほぼ90度の角度をもって配置され、さらに溝と溝との間は、あたかも陸橋のように掘り残されていることから、何らかの区画を意識して掘られた可能性が高いと思われる。直接ではないが、SD11から、S字口縁甕破片が出土している。勘案すれば、即断はできないが、方形周溝墓とは考えられないだろうか。しかし、その場合、2区においてSD14の続きが検出されない点は疑問が残ると同時に、SD12～14から根拠となる遺物が出ていないことも積極性に欠ける。

今回の調査は、この地区における初めての本格的な発掘調査であり、決して広い面積を掘ったわけではないが、多くの疑問が投げ掛けられた。その疑問に答えるためには今後、当地域での発掘例の増加に期待すると同時に、他地域との比較、類例研究を怠らずにいなくてはならない。

図 版



第Ⅰ面全景（西より）



第Ⅰ面全景（東より）



第2面全景（西より）



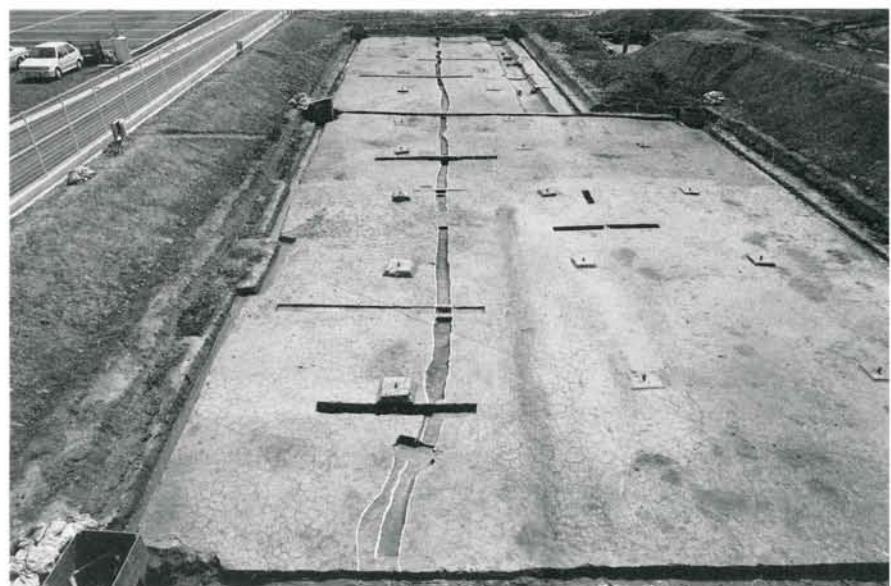
第2面全景（東より）



調査前風景
(東より)



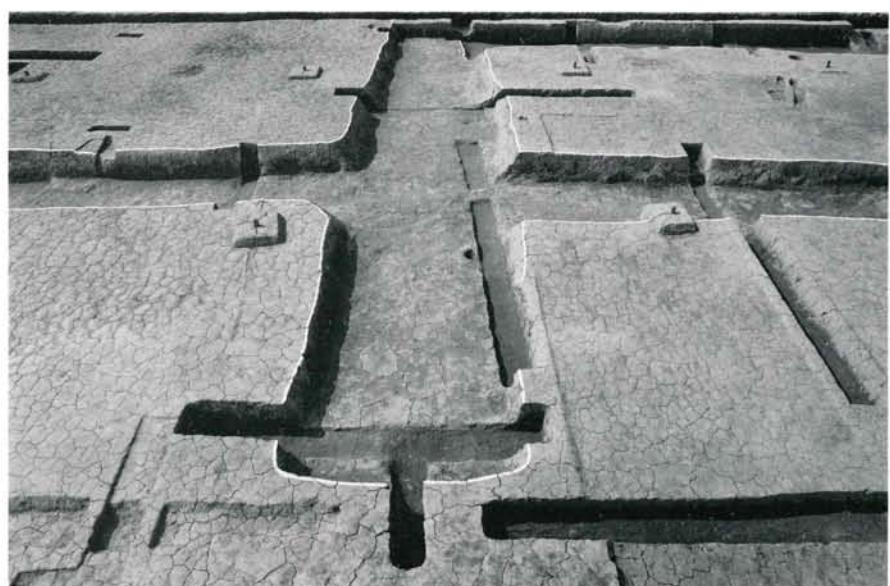
重機掘削風景



SD01
完掘状況（東より）



SD02
完掘状況（西より）



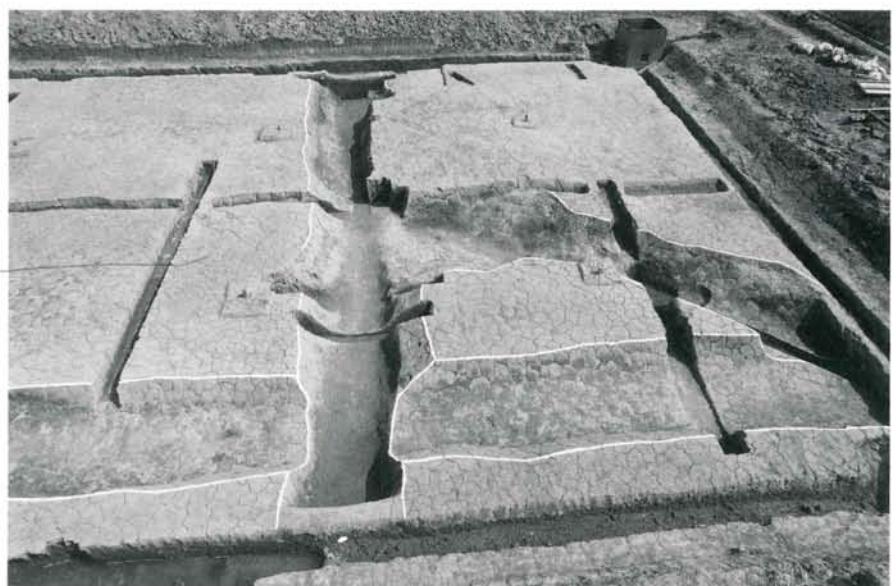
SD02・04
交差状況（南より）



SD02・05
交差状況（東より）



SD07
完掘状況（北より）



SD02・08・09
完掘状況（北より）



SD08遺物出土状況

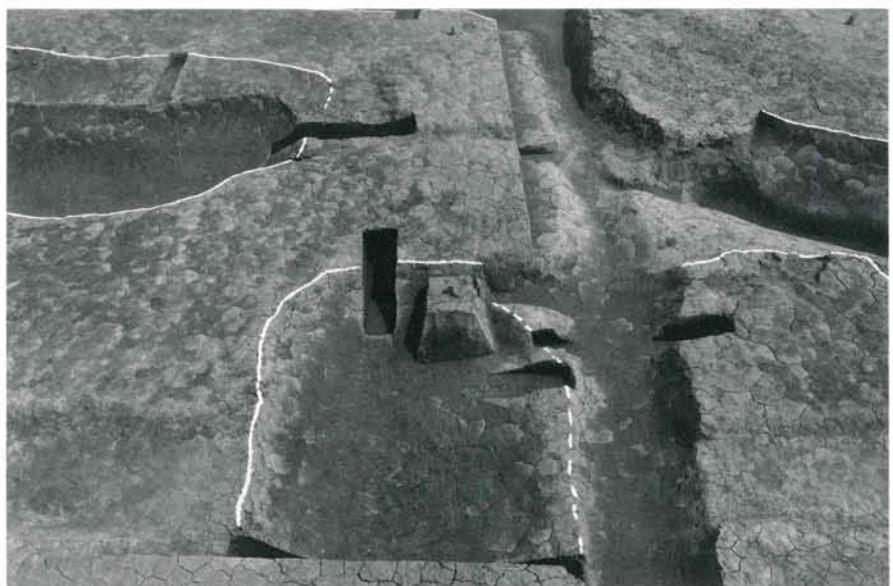
SD12
完掘状況（北より）



SD13
完掘状況（東より）



SD14
完掘状況（北より）





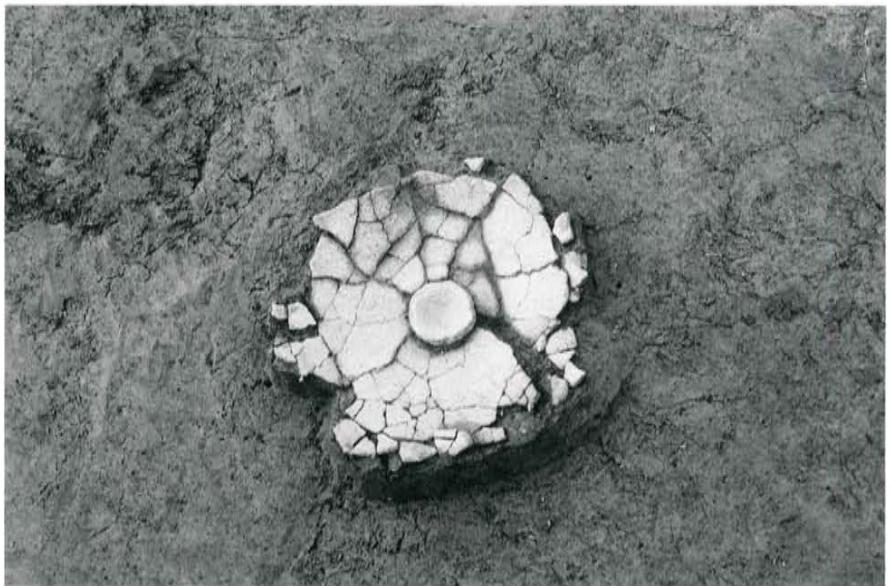
SD12・13・14
完掘状況（南より）



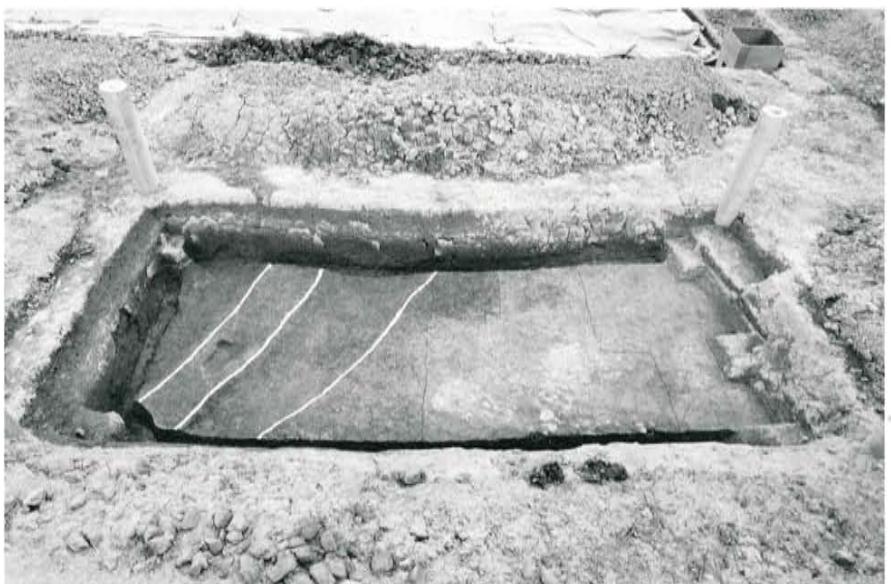
SD15
完掘状況（北より）



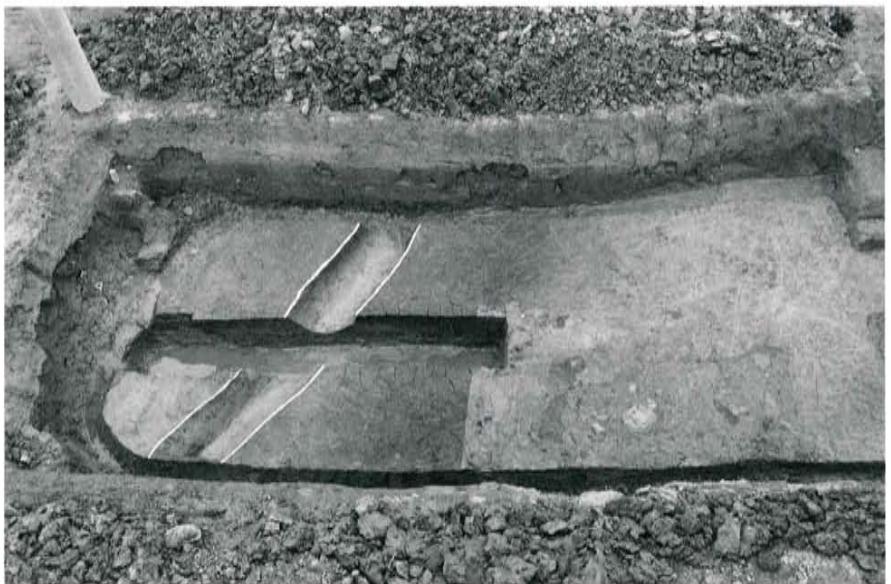
SD16
完掘状況（南東より）



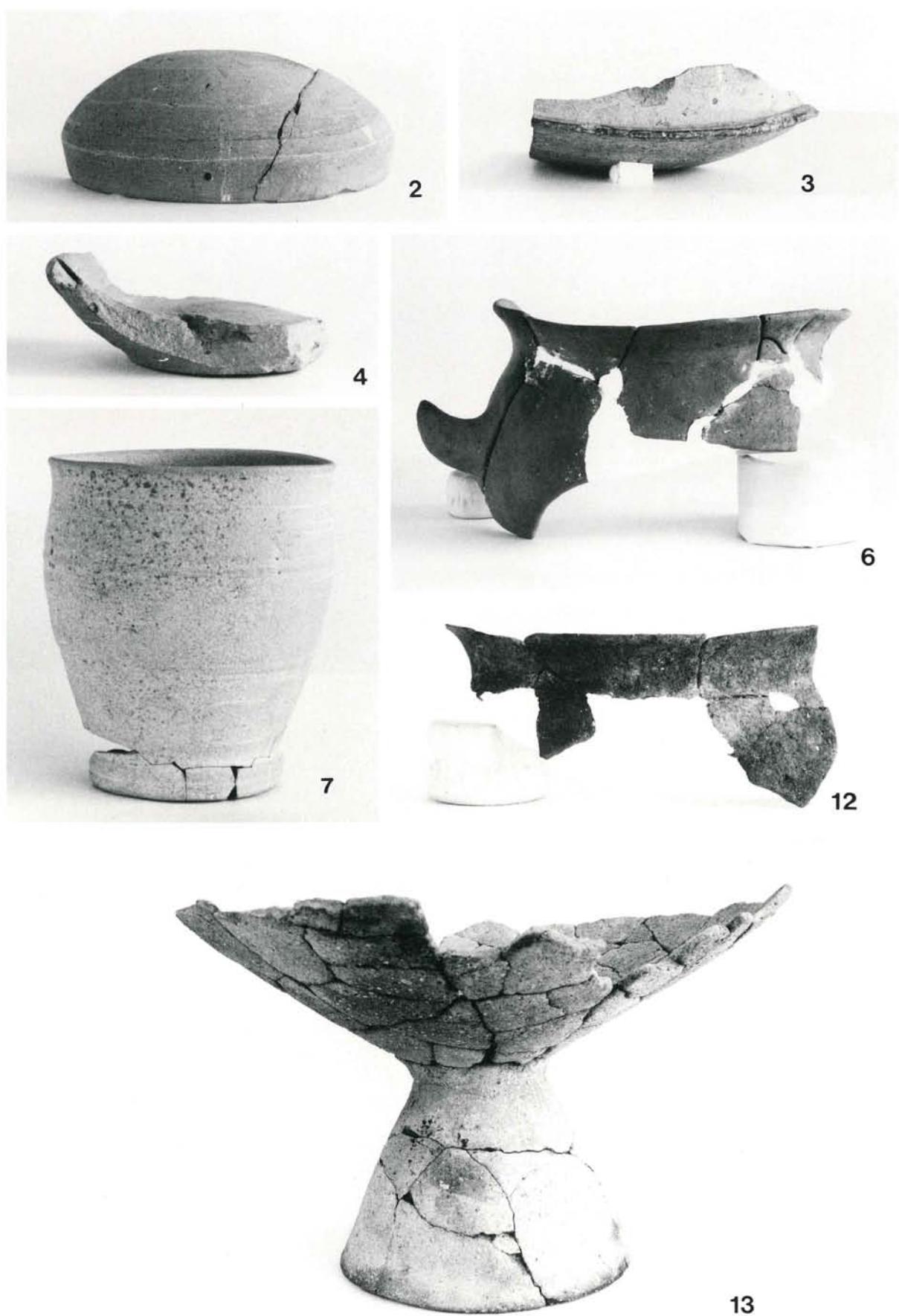
台付甕出土状況

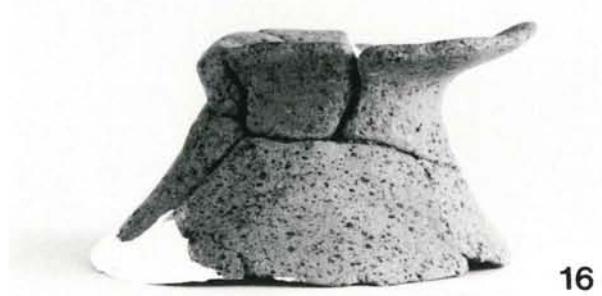


第2区
SD 10完掘状況
(北より)



第2区
SD 18完掘状況
(北より)





山 口 遺 跡

ヤマハ発動機株式会社GHP技術棟建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1993年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

印 刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166-1
TEL (054) 282-4031

